

資料 :日本における Dickens の言語・文体研究書誌
A Comprehensive Bibliography
on the Studies of the Language and Style
of Charles Dickens in Japan

堀 正広

研究史概観

F. R. Leavis は *Dickens the Novelist* (Pelican Books, 1972: 245-5)の中で、語、句、言葉の響き、イメージなど、文学作品において様々な芸術的な文体を生み出した作家は、Shakespeare の次に Charles Dickens (1812-70)である、という意味のことを言っている。おそらく、日本における文学者の言語・文体研究においても、Shakespeare についてもっとも研究されている作家は Dickens であろう。これは Shakespeare の文学世界が彼の創造的で多彩な言語表現を抜きにしては考えられないように、Dickens もまた言語と文学との密接な関係を強く意識させる作家であることを意味している。従って、このような作家の日本における言語・文体研究の書誌作成は単に一人の作家の言語・文体研究の歴史を知るだけでなく、日本における英語圏の文学者の言語・文体研究の方法や動向・歴史を知る一助ともなるであろう。本稿は、2003年11月30日の段階での日本における Dickens の言語・文体研究に関する網羅的な書誌である。書誌を列記する前に日本における Dickens の言語研究の歴史を概観してみたい。

Dickens の言語研究に関して日本で最初の業績は、我が国における最初の本格的な英文法研究といわれる市川三喜博士の『英文法研究』の第二編「ディケンズの俗語の研究」であろう。ディケンズの生誕100年にちなんで書かれた66ページにわたるディケンズの俗語研究は、スカンディナヴィアの学者 J. Storm の *Englische Philologie* (1881)を拠り所にし、オランダの学者 C. Stoffel の俗語研究を参考にして書かれている。音韻、形態、統語の面から Dickens の俗語の特徴が詳細に指摘されている。

日本で最初の Dickens の言語研究は市川博士によるものではあるが、日本における本格的な Dickens の言語研究は山本忠雄博士の *Growth and System of the Language of Dickens* (1950, 51, 52)から始まったと言っても過言ではない。山本博士は、Dickens の英語を歴史的に形成されてきた口語的な慣用表現 (イディオム)として捉え、また "delimitable unite"としての慣用表現に見られる英語の内的な構造を明らかにしようとした。本書は Part I: The Growth and Structure on Dickens's Language と Part II: Idiom and Idioms の二部構成である。Part I は 20 章からなり Dickens が自分自身の成長に伴って、目にし、耳にして作品に取り入れた慣用表現を調査している。たとえば、"Ketcher, Ketcher"という母親または乳母の愛撫語は幼少期の慣用表現として *The Cricket on the Hearth* から収集されている。また、文学作品の読書によって得られた慣用表現のひとつに、Dickens の好きな句として、"everything in a concatenation accordingly" (万事よろしく)が取りあげられているが、これは、Goldsmith の *She Stoops to Conquer* (1773)の中の有名な句で、Dickens は書簡の中で好んで用いていることが指摘されている。この他に聖書、Shakespeare、Milton などからの慣用表現も見られ、このようにして集められ分析されている慣用表現は数千種類にのぼっ

ている。本書によって Dickens の英語の特徴は慣用表現の豊かさと多様性にあることが分かるだけでなく、慣用表現の出典や使い方を通してみられる Dickens の創造性を知ることができる。Part II は 3 章からなり、慣用表現のパターンあるいはその形成について述べられている。たとえば、line (職業) を用いた慣用表現は Dickens の作品全体に広く見られる。line の慣用表現を比べてみると発達段階が窺われ、"the line of business" が第一段階で、次に "line" が独立に分離し、"in the potato line" (ジャガイモが商売) において完全な慣用表現となったようだとのある。Dickens にはこの最終的なタイプが多く、"in the comic line" (喜劇が専門)、"I ain't much in the chiminal line my self" (私は薬のことはあまり詳しくない) のような表現がしばしば見られるという山本博士は、このように Dickens に見られる慣用表現をきわめて網羅的に調査、分析している。

山本博士の研究のもう一つの優れた特徴として、現在、言語学や文体論において普通に用いられている register, idiolect, deviation などの概念を先取りして Dickens の文学の言語が論じられていることである。Dickens の英語は、しばしば時代を先取りした創造的な言語使用であると言われるが、山本博士の研究も時代を先取りした研究で、まさに日本が世界に誇る philological な研究の金字塔と言うべき業績であろう。

1960 年代は山本忠雄「他による『チャールズ・ディケンズの文体』や『Our Mutual Friend の文体構造』(東田千秋)に代表されるように作品のテーマや構造と表現の問題を論じる業績が散見される。

1970 年代で特徴的な出来事は、G.L. Brook の *The Language of Dickens* (1970) に影響を受けた研究が多く見られることである。この *Language of Dickens* 自体、Dickens の言語研究、特に文体研究の礎になった Randolph Quirk の *Charles Dickens and Appropriate Language* (1959) と "Some Observations on the Language of Dickens" (1961) に強く影響を受けた研究である。Brook の *Language of Dickens* は Dickens の小説の言語研究に社会言語学の視点から照準を合わせ、Dickens の英語の多様性を浮き彫りにしようとした画期的な研究である。この研究書は 7 章からなり、第 1 章 Style で Dickens の文体の特徴を概観した後、第 2 章 Class Dialect (階級方言)、第 3 章 Substandard Speech (非標準英語)、第 4 章 Regional Dialect (地域方言)、第 5 章 Idiolect (個人言語)、第 6 章 Language to Suit the Occasion (状況語)、第 7 章 Proper Names (固有名詞) となっている。本書の研究に影響を受けた研究として、個人言語を扱った『Micawber 氏の英語について』(河井迪男、1972 年)、状況語を扱った『ディケンズのことば』(吉田孝夫、1980 年)がある。階級方言を扱った『Joe Gargery の方言と職業語』(田中逸郎、1972 年)と非標準英語の語彙を扱った "Substandard Vocabulary in *Oliver Twist*" (Toshiro Tanaka) は Brook だけでなく、Dickens の音韻研究の画期的な業績と言える Stanley Gerson の *Sound and Symbol in the Dialogue of the Works of Charles Dickens* (1967) にも影響を受けた研究である。

1980 年代になると若い研究者の論文が多く、研究者の世代交代が見られると同時に、アプローチの仕方も多様化してきた。語彙に注目した "The Language of Charles Dickens's *Bleak House*: With Special Reference to Words and Phrases" (Yuko Furukawa)、elegant variation を扱った "The Language of Charles Dickens's *David Copperfield*: With Special Reference to Elegant Variation" (Masahiro Hori)、逸脱した collocation を論じた "Collocational Defamiliarization in Dickens's *The Cricket on the*

Hearth" (Tomoji Tabata)、語りの問題を扱った「ディケンズの文体研究序説」(斎藤兆史)や"The Language of Charles Dickens's 'I' – Narrations" (Yuko Ikeda)などがある。これらの論文は G.N.Leech and M.H. Short の *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose* (1981, Longman) の英語学文体論の考え方に強く影響を受けている。

1990年代に入ると Knud Sørensen の *Charles Dickens: Linguistic Innovator* (1985, Arkona)、の影響もあり OED を頻繁に使い、philological な緻密な読みに基づいた用例の収集と英語学の理論に基づいた分析がこれまで以上に綿密に行われるようになった。"Some Lexical Observations on the Language of *Our Mutual Friend*" (Yuko Ikeda)、"Grammatical Anomalies of American English in Dickens" (Osamu Imahayashi)、"Dickens' Artistry in Flora's Speech" (Miyuki Nishio)、"Metaphors in *Great Expectations*" (Saoko Tomita) などである。さらに、新しい研究手法としてコンピュータを使ったコーパス言語学による言語研究が登場し、これまで指摘されなかった Dickens の言語特徴が分析され始めた。たとえば、"Dickens's Narrative Style: A Statistical Approach to Chronological Variation" (Tomoji Tabata) は "the", "a", "of", "in", "and", "I", "you" などの機能語の生起パターンとテキストとの相互関係を主成分分析によって解析し、これらの機能語の使用に Dickens の作品の初期から後期にかけて文体の変化が明らかに見られることを指摘した。「Charles Dickens, *Great Expectations* の分析 計算機文体論への挑戦」(岡田毅)では実験的な試みとして登場人物名の分布状況と生起関係、"seem" 類の用法などをコンピュータ処理の結果を活用して「テキストの新しい読み」を模索している。「*The Oxford English Dictionary on Compact Disc* による Dickens の初例研究」(堀正広)は OED2 on CD-ROM を使って Dickens から引用されている初例をすべて調査している。Dickens は Shakespeare のように造語を好む創造的な作家であると同時に、様々な分野で新しく生まれた語彙を収集し、作品に積極的に使う新語彙の収集家という Dickens の新たな面を浮き彫りにしている。このように、コンピュータを利用して、電子化されたテキスト、統計処理ソフト、CD-ROM 化された辞書など新しいテクノロジーを駆使した言語・文体研究は Dickens だけでなく他の作家の言語・文体研究においても、これからますます盛んになっていくであろう。ただ、文学作品の言語研究はあくまでも close and sensitive reading がまず先にあり、その読みの経験と文学的な鑑賞を背景にして、コンピュータを使って得られた資料を分析することが重要である。そのような新たな分析方法の視点に立って Dickens の言語を collocation の面から分析した研究書が、*Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis* (Masahiro Hori) である。この *Investigating Dickens' Style* は Dickens の全作品のコーパス (460 万語) を作成し、18 世紀及び 19 世紀の小説の言語と比較しながら、コーパス言語学の手法によって得られた資料と精読による解釈を基に collocation の点から Dickens の言語・文体の特徴を分析している。文体分析における様々な新しい試みによって新しい発見と解釈を提示している。

今後注目される研究として、まずあげなければならないのは、Dickens Lexicon 作成プロジェクトについてである。前述の *Growth and System of the Language of Dickens: An Introduction to A Dickens Lexicon* は、副題にあるように Dickens Lexicon の作成を最終目標として書かれた研究書である。山本博士はこの Lexicon 作成のために数万枚のカードを集められた。しかし、原爆ですべて消失したため、戦後若干の協力者と

共に再び約6万枚のカードを作られた。晩年はこのカードの整理に没頭されたが、残念ながら Lexicon の完成を見ることはなく1991年に他界された。10年後、この Lexicon 編纂のために広島大学関係者10名、熊本大学関係者9名のチームが結成され、現在作業が進められている。Dickens の全作品も同時に収めた Lexicon を2,3年後にCD-ROM版で刊行される予定である。

次にあげられる研究は、今林氏によって積極的に進められている Dickens の作品にみられる dialect 研究である。すでにその一部は "Phonological Features of the Dialect in *Hard Times*" や "Lexical Studies on the Regional Dialect in *Hard Times*" などで発表されているが、今後網羅的に用例が収集され、Dickens の literary dialect の詳細な研究結果が発表されるであろう。

コンピュータを利用した言語文体研究の中心的な存在である田畑氏は、John Burrows が行った高頻度語の生起頻度に基づく計量文体分析の実践的な業績である *Computation into Criticism: A study of Jane Austen's novels and an experiment in method.* (Clarendon Press, 1987) を参考にしながら、計量文体論の手法を使って Dickens の新たな言語や文体の特徴を明らかにしようとしている。すでに様々な論文を発表しているので近い将来研究書としてまとめられるであろう。

高口圭轉氏は、Dickens の文体を repetition の点から明らかにしようとしている。Dickens の言語は variation と repetition が同時に共存しているといわれる。しかしこの点における詳細な研究はまだ充分になされていない。すでに、高口氏によって公刊されている *The Language of Charles Dickens's A Tale of Two Cities: From a Cohesive Point of View* を基にして Dickens の repetition の用法をさらに詳細に分析しようとしている。

現在、Dickens の書簡は没年の1870年まで12巻が出版されていて、そのうち11巻はCD-ROMで公刊されている。前述の山本博士の *Growth and System* にも書簡からかなり引用されているが、Dickens の書簡の英語に関する本格的な研究はまだほとんどなされていない。文学作品の創造的な言語と書簡の言語には何らかの違いがあるのか、興味深い問題である。

以上、日本における Dickens の言語・文体研究の歴史と展望を概観してきた。今後の Dickens の言語・文体研究は、ますます発展していく言語理論を背景にして、綿密で精緻なテキストリーディングに基づき、さらにコンピュータを利用した網羅的なデータを駆使して、これまで以上に学際的な研究領域として発展していくであろう。

書 誌

1912年

・市川三喜、「ディケンズ俗語の研究」『英文法研究』研究社。

1942年

・梶井迪夫、「Dickens の語彙」『英語教育』(広島文理科大学)7.1.

1943年

・山本忠雄、「Dickens Lexicon の作製に就いて」『英文学研究』XXIII, 3.

1945年

・山本忠雄、「Dickens の英語に現れた動詞」『市川博士還暦祝賀論文集』第3輯 研

究社.

1950年

・Yamamoto, Tadao, *Growth and System of the Language of Dickens: An Introduction to a Dickens Lexicon* 関西大学英语学会

・山本忠雄、『Dickens の英語の生長と体系』学位論文抄録文学・哲学・史学学会連
合編集研究論文集』1.

1951年

・山本忠雄、『ディケンズの英語』新英米文学講座(10) 研究社.

1953年

・五島忠久、『The Cricket on the Hearth の英語について』大阪大学南北校研究集
録』(人文・社会科学)1.

1954年

・山本忠雄、『Dickens の英語の背景』英語青年』100, 5.

・山本忠雄、"A Memoir on the Joint Research for the Compilation of the *Dickens
Lexicon*" *Anglica* 1. 5.

1955年

・陣崎克博、『Dickens の比喩表現』*Anglica* 2.2.

1956年

・山本忠雄、『Dickens の思想と文章』、英語青年』102.3.

1957年

・陣崎克博、『Dickens の比喩表現の特性とその推移』長崎大学学芸学部人文科学
研究報告』7.

・山本忠雄、『2 Henry IV に現れた Dickensian な言語』*Anglica* 2.5.

1958年

・山本忠雄、『十九世紀の英語』英語青年』1004.5.

1959年

・中村 有、『Dickens の拡充形』愛媛大学紀要』(人文科学) 5.1.

1960年

・山本忠雄 他、『チャールズ・ディケンズの文体』南雲堂.

1962年

・山本忠雄、『Dickens Lexicon の作成について』*Anglica* 4.5.

1963年

・山本忠雄、『表現の層と文体の構造——Lamb と Dickens』日本文体論協会会報』II.

1964年

・山本忠雄、"Historical Studies in English Literature with Special Reference to
Dickens's Works," *Studies in English Literature* (日本英文学会)

1965年

Yamamoto, Tadao "Reality and Imagination in Dickens's Works," *The Kenkyu* (神戸大
学英文学会) 35.

1967年

・富田和夫、『Oliver Twist の文体：反語表現について』外国文学研究』(東海大学
文学部)

1968 年

・山本忠雄、『Dickens Land』*Kobe Miscellany* No. 5.

1969 年

・東田千秋、『*Our Mutual Friend* の文体構造』『叢子大文学 (外国文学篇)』(大阪女子大) 21.

1970 年

・山本忠雄、『ディケンズの英語—Mr. Pickwick と Sam Weller』『英語研究』増刊号.

・山本忠雄、『Dickens の言語的な制作』『英語青年』116.6.

・吉田孝夫、『*Oliver Twist* における登場人物の強意表現の諸形式』『陸大英語評論』(京都産業大学英米語学会) 2.

・吉田孝夫、『*Christmas Books* の文体構造と語順について』『英文学試論』(同人雑誌) 3.

・Masui, Michio "Dickens in Hiroshima" 『英語英文学研究』(広島大学英文学学会) 17.2,

・Yamamoto, Tadao "Our Tortured Work" 『英語英文学研究』(広島大学英文学学会) 17.2.

1971 年

・吉田孝夫、『Dickens の作品における身内間の呼び掛け語』『英文学試論』(同人雑誌) 4.

1971-2年

・吉田孝夫、『Dickens の作品における登場人物の呼掛け語について』『滋賀大学教育学部紀要』(人文科学・社会科学・教育科学) 20-21.

1972 年

・河井迪夫、『Micawber 氏の英語について』『ディケンズの文学と言語 : ディケンズ没後百年記念論文集』(河井迪夫・田辺昌美編)三省堂.

・田中逸郎、『Joe Gargery の方言と職業語』『ディケンズの文学と言語 : ディケンズ没後百年記念論文集』(河井迪夫・田辺昌美編)三省堂.

・安藤貞雄、『表現論の構造と体系—*Great Expectations* を例証として』『ディケンズの文学と言語 : ディケンズ没後百年記念論文集』(河井迪夫・田辺昌美編)三省堂.

・河井迪夫、『Dickens の言語 : 研究と課題—まとめにかえて』『ディケンズの文学と言語 : ディケンズ没後百年記念論文集』(河井迪夫・田辺昌美編)三省堂.

・吉田孝夫、『*David Copperfield* における登場人物の話し言葉—「健康」と「挨拶」に関して—』『英文学試論』(同人雑誌) 5.

・山本忠雄、『小説家の文体』『英語文学世界』7.9.

1973 年

・吉田孝夫、『*David Copperfield* における「女性語」について』『滋賀大学教育学部紀要』22.

1974 年

・Toshiro Tanaka, "Substandard Vocabulary in *Oliver Twist*" 『文学論集』(関西大学)

1974-5 年

・吉田孝夫、『Dickens の作品における口語文法—代名詞』『滋賀大学教育学部紀

要』(人文・社会・教育)23-24.

1975年

吉田孝夫、『Dickens の作品における口語文法—人称代名詞 (Personal Pronouns)』
『英文学試論』(英文学試論会)6.

吉田孝夫、『Dickens の作品における口語文法—代名詞』『滋賀大学教育学部紀要』
(人文科学・社会科学・教育科学)24.

1976年

吉田孝夫、『Dickens の作品における口語文法—動詞』『滋賀大学教育学部紀要』
(人文科学・社会科学・教育科学)25.

1979年

吉田孝夫、『Dickens の作品における口語文法—形容詞,数詞,副詞,接続詞,前置詞』
『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学』(通号 29).

1980年

吉田孝夫、『ディケンズのことば』あぼろん社.

吉田孝夫、『ディケンズの作品における「状況語」』『文体論研究』(日本文体論協会)
27.

吉田孝夫、『Dickens の作品における口語文法—動詞,代名詞,形容詞,副詞,前置詞,
間投詞』『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学』(通号 30).

1981年

吉田孝夫、『ディケンズの言語—個人語』、『滋賀英文学会論集』(滋賀大英文学会)
1.

Furukawa, Yuko "The Language of Charles Dickens's *Bleak House*: With Special
Reference to Words and Phrases," *Kurokami Review* 4.

田中逸郎、『Dickens の試み』関西大学文学論集』30.4.

Hori, Masahiro "Some Aspects of the Participant Line in Charles Dickens's *Oliver
Twist*," *Kurokami Review* 4.

1982年

Hori, Masahiro "The Language of Love in Charles Dickens's *David Copperfield*,"
Kurokami Review 5.

1983年

吉田孝夫、『ディケンズの文体』『滋賀大学教育学部紀要』(人文科学・社会科学)33.

吉田孝夫、『ディケンズの文体』『滋賀英文学会論集』(滋賀大英文学会)2.

吉田孝夫、『Dickens の言語「状況語」』『梶井迪夫先生退官記念 英語英文学研究』
研究社.

斎藤兆史、『ディケンズの文体研究序説』『リーディング』(東京大学大学院)4.

寺内孝、『Dickens's *Hard Times* and the *OED*』『文体論研究』(通号 30) .

1984年

崎村耕二、『ディケンズ文学と言語表現のフォーム -- 概論』『高知大学学術研究報
告人文科学』33.

Hori, Masahiro "The Language of Charles Dickens's *David Copperfield*: With Special
Reference to Elegant Variation" 『鹿児島女子短期大学紀要』19.

1985年

- ・梅 正行、『言葉の河で何が捕れるか -- チャールズ・ディケンズの言葉 (2)』
Metropolitan (東京都立大学大学院) 29.
- ・吉田孝夫、『ディケンズのことばの遊び』『滋賀大学教育学部紀要』(人文科学・社会科学) 35.
- ・Hori, Masahiro "The Rhetoric of Discourse in Dickens's *Bleak House* — With Special Reference to Double Narrative —" 熊本大学英語英文学 28.
- 1986 年
- ・Ikeda, Yuko "The Language of Charles Dickens's 'I' — Narrations" 北海道英語英文学 31.
- 1987 年
- ・吉田孝夫、『ディケンズのユーモアの言語』『滋賀大学教育学部紀要』(人文科学・社会科学 教育科学) 37.
- ・Hori, Masahiro "The Language of Charles Dickens's *Great Expectations* —With Special Reference to I-Narrative —" 熊本大学英語英文学 30.
- 1988 年
- ・池田裕子、『Dickens における笑いと言語的逸脱について』*The English Literature in Hokkaido* 33.
- ・崎村耕二、"A Note on the Speech of Dickensian Characters" 高知大学学術研究報告』(人文科学) 37.
- ・吉田孝夫、『ディケンズのユーモアの言語』、『滋賀大学教育学部紀要』(人文科学・社会科学 教育科学) 38.
- ・Tabata, Tomoji "Collocational Defamiliarization in Dickens's *The Cricket on the Hearth*," *Kurokami Review* 11.
- 1989 年
- ・瀬良晴子、"Language in Dickens' Fiction — Description of the Evil World" 大阪音楽大学研究紀要 28.
- ・Tabata, Tomoji "Double-meaning in the Language of Dickens's *Christmas Books*," *Kurokami Review* 12.
- 1991 年
- ・Tabata, Tomoji "Characterization in Dickens's *Christmas Books*: a Computer-assisted Approach to Idiolect" 熊本大学英語英文学 34.
- ・高口圭輔、『David Copperfield の言語 心理表現についての考察』熊川良治編 『英語英文学点描』(溪水社).
- 1992 年
- ・Hori, Masahiro "Some Stylistic Observations on the Characters' Eyes and Acts of Viewing in Dickens's *Hard Times*" 熊本学園大学創立 50 周年記念号 』.
- 1993 年
- ・Ikeda, Yuko "Some Lexical observations on the Language of *Our Mutual Friend*" 熊本大学英語英文学 36.
- ・Tabata, Tomoji "The Language of Dickens and Its Computer-based Evidence: A Step towards a Chronological Study" 熊本大学英語英文学 36.
- ・Hori, Masahiro "Some Collocations of the Word 'Eye' in Dickens: A Preliminary

- Sketch" 近代英語の諸相』(近代英語協会 10 周年記念号) 英潮社.
- Hori, Masahiro "Nursery Rhymes in Dickens's Language" 熊本大学英語英文学』36.
- ・Koguchi, Keisuke "Some Stylistic Observations on Charles Dickens's *Hard Times*: With Special Reference to Conflict between Fact and Fancy" 熊本大学英語英文学』36.
- 吉田孝夫、『ディケンズのユーモアの言語』、阿井迪男先生退官記念 英語英文学研究』英宝社.
- ・Imahayashi, Osamu "Linguistic Characterization in Mrs. Gamp's Speech," *Phoenix*, No. 40, pp. 16-31.
- ・Imahayashi, Osamu "Verbal Characterization in *Oliver Twist* and *Great Expectations* —with special reference to Mr. Bumble and Joe Gargery—" *ERA, New Series*, Vol. 11, No. 1, pp. 38-51.
- 1994 年
- ・Tabata, Tomoji "Dickens's Narrative Style: A Statistical Approach to Chronological Variation," *Revue. Informatique et Statistique dans les Sciences Humaines* 30.
- ・Imahayashi, Osamu "Some Lexical Features of the 'Sketches' in *Sketches by Boz*," *ERA, New Series*, Vol. 12, No. 1, pp. 38-57.
- 1995 年
- ・Tomoji Tabata "Narrative Style and the Frequencies of Very Common Words: A Corpus-Based Approach to Dickens's first-person and third-person narratives," *English Corpus Studies* 2.
- 1996 年
- 安藤貞雄、『表現論の構造と体系 : *Great Expectations* を例証として』英語学の視点』開拓社.
- 1997 年
- ・Ikeda, Yuko "Idioms and Puns in Charles Dickens," *The English Literature in Hokkaido* 42.
- ・Ikeda, Yuko "Fire in Dickens: With Special Reference to Collocational Cohesion," *KGU Journal of Language and Literature* 4.1.
- 岡田 毅、『Charles Dickens, *Great Expectations* の分析 計算機文体論への挑戦』文体論研究』43.
- ・Imahayashi, Osamu "Origins of *Hookey Walker* and Dickens" 皆備国際大学社会学部研究紀要』第 7号, pp. 255-262.
- ・大野いずみ、『*A Christmas Carol* における文体的倒置文 : 登場人物の視点を中心として』学習院大学英文学会誌』.
- 1998 年
- ・Imahayashi, Osamu "Grammatical Anomalies of American English in Dickens," *ERA, New Series*, 16.2.
- ・Nishio, Miyuki "The Methods of Speech Presentation in *Martin Chuzzlewit*," *ERA* 16. 1.
- 1999 年
- ・Hori, Masahiro "Collocational Patterns of Intensive Adverbs in Dickens: A Tentative Approach," *English Corpus Studies* 6 (英語コーパス学会)

・Imahayashi, Osamu "Dickens's Use of American Pronunciation" 吉備国際大学社会学部研究紀要 9.

・Nishio, Miyuki "Linguistic Identifiers in *Little Dorrit*," *ERA* 17.1.

2000 年

堀 正広、『*The Oxford English Dictionary on Compact Disc* による Dickens の初例研究』熊本学園大学附属海外事情研究 27.2.

・Ikeda, Yuko "Windows in Dickens's Later Novels," *Kumamoto Studies in English Language and Literature* 43.

・Nishio, Miyuki "Dickens' Artistry in Flora's Speech," *ERA* Vol. 18, No. 1.

2001 年

・Imahayashi, Osamu "Americanisms in Dickens," *Originality and Adventure: Essays on English Language and Literature in Honour of Masahiko Kanno* (Eihosha).

・Imahayashi, Osamu "Dickens on the Use of Americanisms" 松本憲尚先生退官記念：英語教育内容学と英語教育学 』

・Keisuke Koguchi *The Language of Charles Dickens's A Tale of Two Cities: From a Cohesive Point of View* 安田女子大学 (Monograph Series No. 4).

2002 年

・Hori, Masahiro "Collocational Patterns of -ly Manner Adverbs in Dickens," Toshio Saito et al. (eds) *English Corpus Linguistics in Japan* (Amsterdam: Rodopi).

・Tabata, Tomoji "Investigating Stylistic Variation in Dickens through Correspondence Analysis of Word-Class Distribution," Toshio Saito et al. (eds) *English Corpus Linguistics in Japan* (Amsterdam: Rodopi).

・Imahayashi, Osamu "Phonological Features of the Dialect in *Hard Times*" 吉備国際大学社会学部研究紀要. (12).

・Imahayashi, Osamu "Some Lexical Features of the "Sketches" in *Sketches by Boz*," *ERA* Vol. 12, Nos. 1.

・Nishio, Miyuki "Reporting Clauses in *The Old Curiosity Shop*," *ERA* Vol. 19, Nos. 1&2.

・Tomita, Saoko "Metaphorical Expressions in *David Copperfield*," *ERA* Vol. 19, Nos. 1&2.

・田畑智司、『Corpus-Based Stylistics--MF/MD 法による文体比較--』英語文体論の方法と射程』大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科。

2003 年

・Yamamoto, Tadao *Growth and System of the Language of Dickens: An Introduction to a Dickens Lexicon* (The Third Edition) 溪水社。

・田辺洋子、サム・ウェラーの比喩表現—The Pickwick Papers における意義と効果—菅野正彦編 『ful of hy sentence』英語語彙論集』英宝社。

・田畑智司、『Dickens における—ly 副詞の分布 計量分析序説』レトリック研究の方法と射程』大阪大学言語文化部。

・Tomita, Saoko "Metaphors in *Great Expectations*," *ERA* Vol. 20, Nos. 1&2.

・Imahayashi, Osamu "Lexical Studies on the Regional Dialect in *Hard Times*," Kanno, Masahiko (ed.) *Ful of Hy Sentence*. Eichosha: Tokyo, pp. 193-206.

2004 年

•Hori, Masahiro *Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis* Palgrave, Macmillan, UK.

